

第2部 随筆(作文) テーマ「秋祭り」

一般の部

木島平村長賞

馬追の唄

戸田和樹

私の故郷は、愛知県の尾張地方にあった農村地帯でした。私が子ども時代を過ごした昭和三十年代は、まだ農作業に農耕馬が必要とされ、朝夕には、重い荷馬車を引く馬が、町の鉄道駅舎までの道のりを土埃を上げながらゆったりと歩む景色が残っていました。

「馬糞を踏むと、背が高くなるぞ」

そんな迷信が、村の子どもの世界では実しやかに囁かれ、競って馬糞を踏んでいた時代でもありました。

その農村地域を治める八剣神社の境内で行われる秋祭りには、村々の農耕馬が祭りの主役として活躍することになっていました。

的屋の屋台で埋まる神社の境内の一面に、神輿を担いだ農耕馬たちが集められます。どの馬も、普段

は畑を耕したり、荷物を運んだりする力仕事を担っていました。競馬場を走る競走馬とは違って、体も大きく、足も太くて、ずんぐりとした体格をしていました。

その馬たちに神輿を担がせたのは、農耕馬が豊作を司る神様からの使いとして、崇められていたからなのかもしれません。

三日間開かれる秋祭りの最終日。神輿を担いだ馬たちに一升瓶のお酒を飲ませ、神社の前の参道を荒々しく走らせるといふ神事が行われます。村の若い衆たちは、赤い目をした馬の暴走を諫めようと馬にしがみ付き、足を踏ん張ります。もちろん、人間も酒の勢いを借りているのです。次から次と暴走する馬たちは、やがて若い衆たちの力で抑え込まれ、その神事は終わりを迎えます。

気の荒い豊穰の神様を宥めるかのような秋祭り。その神事が終わると、農耕馬たちを馬の持ち主の所に返さなくてはなりません。

馬子が手綱を引きながら、「馬追の唄」を歌います。その後ろを、合の手を入れながら村人たちがついていきます。その「馬追の歌」の歌詞もメロデーも、今ではすっかり忘れてしまいましたが、哀愁のこもった唄声の響きは、未だに心の中に残っているのです。